

人が住み、使われ、語られることで文化財になる建築

-スターハウス団地を“生きた地域のシンボル”へ-

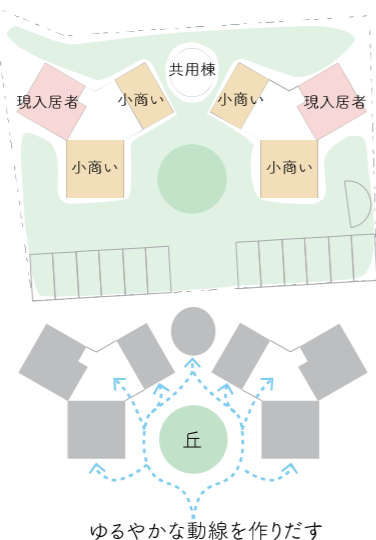


設計コンセプト/地域に求められる機能や魅力を兼ね備えた集住空間を形成する提案

我々は、建築はオブジェクトではなく生活の舞台だと考えています。「人がいる風景」をつくることでスターハウスを当地域のシンボルとし住民に愛され、利用される文化財として計画します。

◎配置構成

一階の中央に向かい合う4区画を小商いができるテナント区画にします。小商いの空間に囲まれた中央の広場は、スターハウスの住人だけでなく、小商いのお店に訪れた人や、地域の人が日常的に使える公的な空間として、地域に開いた場とします。

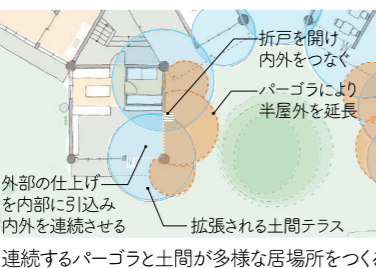


◎動線を作り出す丘

広場の中心に芝生の丘を配置することで様々なアクティビティの舞台となるとともに小商いの空間に向かって緩やかな動線が生まれ、お店の利用者と住民を近づけ、コミュニケーションを促します。

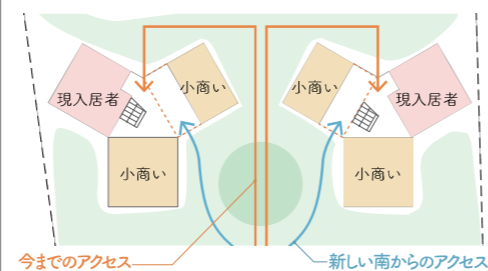
◎内外境界を曖昧にするパーゴラと土間テラス

- ①土間テラスとパーゴラ屋根を設ける
 - ②外部仕上げ(土間)を内部に延長する
 - ③折戸を設ける
- という3つの操作により半屋外空間を積極的に作り内外の境界をあいまいにします。これにより小商いの空間の活動は外部に拡張され、同時に外部の活動を内部に取り込みます。・土間テラスとパーゴラ屋根は、スターハウスの柱の円の幾何学を用い、建物になじみつつ新鮮な風景をつくります。また、サイズの異なる円の連なりは中庭とお店、お店とお店をつなぎ多様な居場所を生みます。



◎開放的な入口階段空間

1Fの階段空間に面する住戸の一部を減築することで正面からのアプローチを可能にし、階段空間は、より広く開放的になります。また、階段室の天井スラブを抜き、全体をトップライトとすることで、明るい空間とします。



◎必要最低限のささやかな増築部

2棟間に共用棟を新設します。キッチン、WC、倉庫など、住人や地域の人が集える内部空間として開放されます。また、図書スペースを配置することで多世代にとっての交流の場となります。



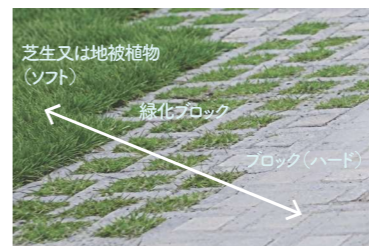
外構計画

◎「公園に住む」ような丘を中心としたランドスケープ

中央の広場の芝生の丘を中心に人の居場所となる公園のようなランドスケープをつくります。過度に管理された空間ではなく、住民が関わり続ける余白をもつ場とし、公園のように共有されながらも、各々が心地よい距離感で好きな場所を見つけられる環境を目指します。

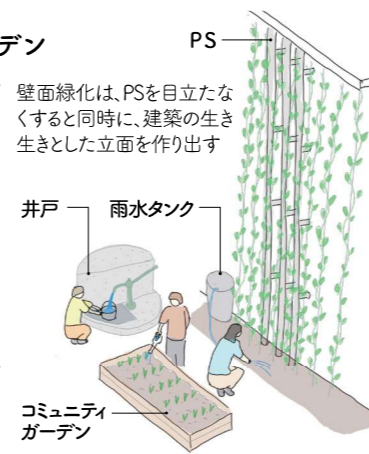
◎ひとつつながりの床

舗装については、ハードな舗装から芝生までゆるやかに切り替わるようにすることで、小商いも共用部も「公園」の一部として行き来のしやすい計画とします。緑化ブロックは保水力があるため、ゲリラ豪雨や洪水の際などに公共インフラの負担を減らすことが可能です。



◎壁面緑化とコミュニティガーデン

壁面緑化を行うことで、設備更新に伴い新規で外部に設置させるPSを隠し、景観に配慮します。また地上面では、壁面を緑化する植栽帯に加え、コミュニティガーデンを設けます。果樹や食べられる植物をテナント入居者及び住民と一緒に育てることで、コミュニティの醸成が期待できます。散水用に設けた雨水タンク及び井戸は、災害時には地域全体で使うことも想定しています。



新たな機能を加える等により継続活用し、国の登録有形文化財としても両立できる計画の提案

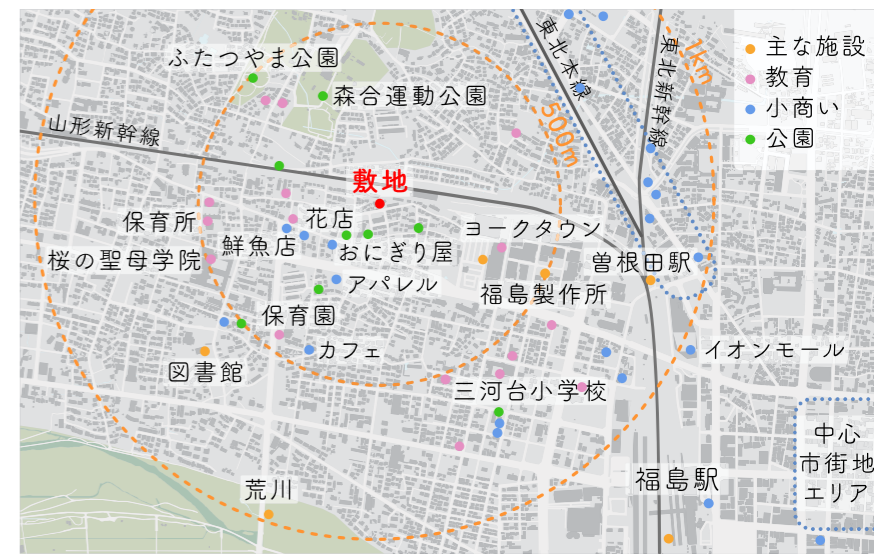
技術提案書(様式5) ※印の欄は記入しないでください

◎背景

ここで生きる機能、必要とされているものについて

本敷地は福島駅から1km以上離れ、駅から徒歩で日常的にアクセスする立地ではありません。一方で、徒歩3分のヨークタウンをはじめ、500m圏内には幼稚園・小学校・児童クラブ・公園・学習施設が集積し、約3,500世帯が暮らす安定した居住環境が形成されています。このような生活圏においては、日用品の利便性に加え、日常的に立ち寄れる身近な交流の場・文化的活動の場の存在が、地域への愛着や定住性を高める重要な要素となります。本地域では、徒歩圏で利用できるそうした文化拠点が限定的であり、生活の質を更新する余地が残されています。そこで本計画では、スターハウスに小規模な高い「小商い」を複数内包することで「人がいる風景」を生み出し、地域の象徴として親しまれる建築を目指します。本提案は、建築をオブジェクトではなく生活の舞台として再生すると同時に、今後の団地再生における持続可能なモデルとなる可能性を示すものです。

受付番号
※ 18

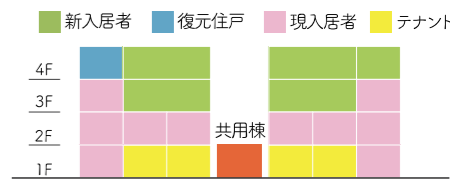


近郊エリアマップ

主要用途は住宅のまま、建築に対する関心を高める情報発信の提案

◎住みながら商いができる住戸構成

- ・高齢者が多い現入居者を下階から優先的に配置することで、足腰の悪い方に配慮した配置計画とします。
- ・二戸を繋げた住戸をつくり、多様な家族構成にも対応できるように計画します。



◎情報の発信

復元住戸は、眺める展示に留めず、実際に一定期間入居し当時の住環境を体験できる場とします。抑えた家賃とする代わりに情報発信を担ってもらい、空間体験そのものが建築を学ぶ機会となる仕組みを提案します。

ハードとソフトの相互関係を構築し、持続可能な住環境運営の「再生モデル」を構築する提案

◎維持管理・運営計画

特定目的会社を軸に、代表テナントが外部及び共用棟等の現地運営を担う公民連携体制とし、維持管理と活用・発信を一体的に行います。(次ページに示す具体的なストラクチャを参照)

◎持続可能な団地運営の再生モデルへ

生活者が歩いて通えるお店(文化拠点)が増えることで、地域の利用価値が向上します。これにより、さらなる住民や出店希望者を呼び込み、周辺の低未利用の土地建物や市営住宅の活用へと繋がります。小さな新陳代謝を継続的に繰り返すことで、スターハウスを核に、持続可能な団地運営の再生モデルとして、地域全体が更新されていきます。本提案は、将来的に他の団地や地域にも転用可能な再生の仕組みを提示するものです。



